



ショートコメント

★★★

Data

2024-56

監督：ハンス・シュタインビ

ッヒラー

原作：『ある一生』ローベル
ト・ゼーターラー著

出演：シュテファン・ゴル
ス キー／アウグスト・ツ
ィルナー／イヴァ
ン・グスタフ／ユ
リア・フランツ・リヒ
ター

ある一生 (Ein Ganzes Leben)

2023 年／ドイツ・オーストリア映画
配給：アットエンタテインメント／115 分

2024 (令和 6) 年 7 月 26 日鑑賞

テアトル梅田

👁️👁️ みどころ

『ロミオとジュリエット』をはじめとする、青春時代の輝く一瞬をドラマチックに切り取った“恋愛小説”に対して、パール・S・バックの『大地』(31年)をはじめとする“大河小説”は、大地と共に生きてきた中国安徽省の農民、王龍(ワンルン)の長い人生を俯瞰する感動作だった。

それと同じように「激動の 20 世紀をアルプスに生きた、名もなき男の愛と幸福に満ちた一生」を描いた本作は？

美しいアルプスの山々は『サウンド・オブ・ミュージック』(65 年)で観たものと同じだが、極寒のアルプス、嵐のアルプスは怖い。それは人々に恵みを与える「大地」の怖さと同じだ。3 人の俳優が幼少期、青年期、老齢期を演じ分ける手法は大河ドラマ特有の手法。“世紀の小説”と称された世界的ベストセラーの映像化はさすが！

◆「“世紀の小説”と称された、世界的ベストセラーを見事に映像化！」本作のチラシにはそんな見出しが躍っている。そう言われても私には全然ピンとこなかったが、チラシの説明によると「原作であるローベルト・ゼーターラーの同名小説(新潮クレスト・ブックス)は、世界 40 カ国以上で翻訳され 160 万部以上発行、ブッカー賞最終候補にもなった作品である。」らしい。そしてまた、「“世紀の小説”“小さな文学の奇跡”などと評された原作を忠実に、かつ美しい情景と共に視覚的に見事に映画化した本作は、激動の 20 世紀の中、80 年にわたって暴力、戦争、貧困に耐えなければならなかったアンドレアス・エッガーの孤独な苦難の人生を描いている。しかし、そんな名もなき男の人生の中にも幸福な瞬間と大きな愛があり、エッガーは自分の人生を受け入れ、無骨に生き抜いていく。」らしい。なるほど、なるほど。

◆原題を「Ein Ganzes Leben」、邦題を「ある一生」とする本作は、そのタイトル通り「激

動の 20 世紀、アルプスに生きた名もなき男の愛と幸福に満ちた一生」を描くものだ。そんな“大河小説”を映画化するについては、主人公アンドレアス・エッガーの幼少期をイヴァン・グスタフィク、青年期をシュテファン・ゴルスキー、老齢期をアウグスト・ツィルナーという 3 人の俳優がそれぞれ演じ分けている。私は本作の予告編を何度も観たから、それだけで本作を既に鑑賞したかのような気になっていたが、時間の都合で本日そのすべてを鑑賞することに。

◆シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を代表とする「恋愛モノ」は男女共に青春時代のベストの時期を一瞬だけ切り取ったものだから、大河小説とは趣が全然違うが、私にとっての“大河小説”の代表はパウル・S・バックの『大地』(31 年)だ。ノーベル文学賞受賞作でもある同作は、中国安徽省にすむ貧農の王龍(ワンロン)の一生を描いたものだが、大きな時代の流れの中で、長く営まれる人間の一生を描いた大河小説として、見事な完成度を示したものだ。もちろん、私は本作の原作も知らないし、本作の主人公の人生も知らないが、予告編を見る限り、まさにアルプスを舞台とし、第 2 次世界大戦をはじめとする激動の 20 世紀を生きた無名の男の一生を描いたものだ。

◆富士山をはじめ、日本でも多くの山登りの名所があるが、アルプスといえば世界的な山登りの名所。私は 1997 年のヨーロッパ旅行の際、1 日だけスイスに行ったことがあるが、そのたった 1 度のごくわずかな体験だけでも、スイスの山々の素晴らしさは強く心に残っている。また、私にとってアルプスの山々といえば、高校 3 年生の時に観た映画『サウンド・オブ・ミュージック』(65 年)の舞台として強く心に残っている。

同作はストーリー自体に直接アルプスの山々が関係するものではなかったが、冒頭のアルプスの山々が映し出される中で、次第に修道女マリア(ジュリー・アンドリュース)の姿がクローズアップされ『The Sound of Music』を歌い出す姿や、ラストにトラップ一家がナチスドイツの迫害を逃れ、亡命するためにアルプスの山を歩きはじめる姿は感動的だった。本作もそれと同じで、80 歳まで生き抜いたアンドレアス・エッガーという男の一生はまさにアルプスの山々と共にあったことが本作を見ているとよくわかる。

◆太陽が照る中で、白い雲に包まれたアルプスの山々は美しいが、当然極寒のアルプス、嵐の真っ只中のアルプスは最悪。アンドレアス・エッガー自身もそのために大怪我を負った上、最愛の女性マリー(ユリア・フランツ・リヒター)も冬の嵐のために命を失ってしまったわけだが、それでもこの男の一生がアルプスの山々と共にあったのは、『大地』の主人公・王龍の一生が洪水やイナゴの被害の中でも常に大地と共にあったのと全く同じだ。本作を鑑賞するについては、そんな「男の一生」と共に、そんな美しいアルプスの山々自体も主人公であることをしっかり押さえておきたい。 2024 (令和 6) 年 7 月 30 日記